

講義年月日 2004年10月13日

講演者 佐藤 康之氏(慶應義塾大学メディアセンター本部)

テーマ 図書館システムの現状と今後

講義内容

1. 図書館システムの変遷(1980~1990年代)

- ・ 先進的な個別開発システム: カードを機械化するイメージ、かなりマニアック
- ・ パッケージシステムの登場: 1983~1985、富士通、NEC、・・・
- ・ 1990年代に入り、UNIXベースのオープンシステムが登場

2. 現在(2000年代)の図書館システム

- ・ 多言語対応システム: 目録業務を核としたトータルシステム
- ・ 多言語対応の海外パッケージが日本に上陸しつつある: IBM など

3. 2010年以降の大学図書館の予測

- ・ 学術情報環境の変化: 電子資源の拡大
- ・ プリント資源と電子資源の混在する図書館(ハイブリッド・ライブラリ)

蔵書構成: 依然として大量のプリント版資料の存在

利用者ニーズ: 電子版へのニーズの方が多い

資料へのアクセス方法

全文への直接的なアクセス

Abstracts & Indexing サービス

メタデータ、目録

業務システムとして電子資源管理のシステム化が求められる

4. 慶應のシステムにおける電子資源管理: 電子ジャーナル提供の例

- ・ EBSCO A to Z: OPAC、電子ジャーナルリスト、地区別おすすめ電子ジャーナルリスト、二次資料DBの4つからフルテキストに辿り着けるようにし、その4つのタイトルマネージメントをEBSCO A to Zで一括して行う(OPACに関しては近い将来実現予定)
- ・ EBSCO Link Source: 二次資料DBから一次資料への橋渡しをする。
DBを検索し、Full Textのマークが出た場合、それをクリックするとLink Sourceの画面が開き、電子ジャーナルへのリンクとOPACでのプリント版所蔵状況確認が容易にできる。常に購読状況がシステムに渡されることにより機能する。
- ・ 電子リソースのマネージメントが今後の図書館システムには必須。外部のリソースとどうやって連携できるかが鍵。

5. OpenURL と DOI

これらの登場により、バンダー間を横切るリンクが可能になった

6. 保存のための図書館システム(デジタル・リポジトリ)

各出版社がフルテキストとメタデータを一括配信し、利用機関は独自のデジタル・リポジトリを構築

このような仕組みが図書館システムに必要なようになってくるのでは。すでに実装段階に入ってきている

7. ハイブリッド・ライブラリにおける図書館システム(プリント版資源の業務管理システムに加えて)

- ・ 電子版資源の提供・保存システム
- ・ 既存の図書館システムとの統合
- ・ 電子資源の流通にかんれんする外部組織との連携強化
- ・ 電子資源の特徴を生かした非来館型サービスの展開
チュートリアル、e-レファレンス、各種リクエスト
- ・ 利用者個人に向けたサービス
My Portal、情報管理ツール、プッシュ型情報提供、・・・